



健康テラス

がんばれ! にっぽん! コロナに負けるな!!

伝染性単核球症 (EBウイルス感染症)

2019年から猛威を振るっている新型コロナウイルスですが、怖い感染症は、他にも沢山あります。その中で、高熱が続いて診断が付かず、病院を転々とする病気があります。その一つに、EB (エプシュタイン・バー) ウイルス感染症があります。

この感染症は、キスや回し飲みなどで感染する事があり、別名「キス病」と呼ばれる事があります。日本人は、90%以上がEBウイルスの抗体を有していると言われます。幼少時期に感染しても、軽症で済む場合が多いのですが、思春期以上に感染すると重症化する事があります。高熱が1か月前後続き、咽頭炎、リンパ腺腫脹、肝脾腫、口腔内潰瘍などが続く場合は、本症例を念頭に置く必要があります。当院では、風邪と診断され、なかなか治らずに病院を転々として、最終的に当院で診断した3例を経験しています。

診断は、長期に続く高熱に加えリンパ節腫脹がある事、血液検査では、異形リンパ球 (病名の由来の単核球) の存在やEBウイルスの抗体価を測定すれば出来ます。

古典的なPaul-Bunnell (ポール・バンネル) 反応は、欧米人に比べ日本人は、陽性率が低いので、現在は検査頻度が低くなっています。

治療は、大学病院の血液内科に紹介し、治療して貰うのが無難です。と言うのは、慢性重症化例は、肺炎、髄膜炎、脳炎、心筋炎、脾腫破裂、バーキットリンパ腫などを起こす事があるからです。アンピシリンなど抗生剤の多剤併用、サイクロスポリンなどの免疫抑制剤、悪性リンパ腫に準じた治療法があり、一般診療所レベルでは高度な治療でもあるからです。

最近はこの感染症の研究が遺伝子レベルで進んでいます。慢性重症化を起こす原因は、EBウイルスに対しての幾つかの遺伝子が欠損し、人の細胞を癌化させる事が分かってきました。イラクでは、戦争で使用された劣化ウラン弾の為、この病気が増えていると言われています。



森 内科クリニック
森 久光 先生

レビー小体型認知症について

レビー小体型という一種のたんぱく質が大脳皮質にたくさん蓄積し、神経細胞が壊れていくもので、高齢者に多いのですが、40歳代で発病することもあります。また男性は女性より約2倍多いと言われます。

初期には物忘れなどの認知障害より幻覚や妄想が先行して表れやすいので、うつ病や統合失調症と間違われることがあります。レビー小体型認知症で早期に表れやすいのはレム睡眠行動障害であり、夜間睡眠中に叫んだり、大きな声で寝言を繰り返すことがあります。また頑固な便秘や尿失禁、起立性低血圧といった自律神経障害などの症状の存在も、レビー小体型認知症を疑う際に参考となります。

レビー小体型認知症では、初期に幻覚 (特に幻視) や妄想が出る事が多く、とても生々しい幻覚が見える事が特徴で、しばしば、具体性を帯びた人や動物の幻視がみられます。

また、“ふとんが人の姿にみえる”といった錯視の症状もしばしばみられます。これらの視覚性の認知障害は暗くなると現れやすくなります。

多くの患者さんでは、経過を追ってゆくと、歩きにくい、動きが遅い、手が不器用になるなどパーキンソン病の症状が出現してくるため、よく転倒したりするようになります。それでレビー小体型病と気づかれる場合が少なくありません。すなわちレビー小体型認知症の患者さんではアルツハイマー病の患者さんと比べて転倒の危険が高く、また、寝たきりにもなりやすいといえます。



もとやま心のクリニック
本山 俊一郎 先生